石山緑地薪能

あたら夜の月影

―覽古考新―

Atarayo no Tsukikage

Rankokoshin

薪能公演プログラム

あたら夜の月影

―覧古考新―

Atarayo no Tsukikage

Rankokoshin

[ご挨拶]

本日は、暑さ厳しい折、「石山緑地薪能」にご来場いただきまして、心からお礼を申し上げます。

石山緑地薪能は、“教文”の愛称で親しまれている札幌市教育文化会館と“Kitara”の愛称で親しまれている札幌コンサートホールが主催に名を連ねています。
教文は開館から今年で47年になりますが、開館当初から施設の特色のひとつである舞台機構を活かし、能楽や文楽、歌舞伎など良質で多彩な伝統芸能を上演し、広く市民の皆様に鑑賞していただく機会を提供させていただいてまいりました。
これまで教文が継続してきた日本が誇る伝統芸能の上演については、舞台公演に付随するワークショップやセミナーなど様々な事業を展開し、現在では、「教文伝統芸能シリーズ」として札幌では観る機会の少ない伝統芸能の普及や次世代を担う子どもたちにも体験してもらう育成にも努めており、このたびの石山緑地薪能もその流れを汲む事業となっております。

札幌での薪能の開催はおよそ20年ぶりとなります。教文では、かねてから予定されていた施設の改修工事が行われており、今年9月末まで休館中であることから、10月のリニューアルオープン記念のプレイベントとして、この石山緑地を会場に薪能を開催する運びとなりました。
この石山緑地は、札幌の造形家集団“CINQ(サンク)”によってデザインされた公園で、本日の能舞台であり、ご来場の皆様の客席にもなっているネガティブマウンドもアート作品です。石切山に囲まれ、西洋の円形劇場コロセウムを彷彿させる印象的なアート空間での薪能は、この地の特性を存分に活かし、通常の薪能とは異なる演出で、趣向を凝らした構成となっております。注目していただきたいプログラムのひとつが能楽とクラッシック音楽の融合です。昨年秋にKitaraで実施し、好評を博した弦楽四重奏と能楽囃子との共演が、石山緑地薪能で再び実現することとなります。ぜひ、お楽しみください。
本公演を数年前から企画し、石山緑地に跨る南区の石山地区や芸術の森地区の地元地域のご協力を賜りながら、今日この夜を迎えることができました。
「石山緑地薪能」は一夜限りの公演となりますが、ご来場の皆様にとって、記憶に残る特別な時間と空間となれば幸いに存じます。
結びに、開催にあたりご支援を賜る関係者の皆様に心から感謝を申し上げるとともに、皆様のご健勝、ご盛栄、ならびに本公演の成功を祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

公益財団法人
札幌市芸術文化財団
代表理事（副理事長）
渡邉 多加志

石山緑地について

札幌市南区に位置する石山地区はかつて建材に最適とされた札幌軟石の産出地として有名でした。現在は工法の変化などにより軟石の採掘は減少しましたが、そのまま残されていた採石場跡地を再生すべく道内の彫刻家集団CINQ（サンク）が立ち上がり、1996年、実に4年の歳月をかけて公園として蘇ったのが現在の「石山緑地」です。園内のエリアは南北に分かれ、北ブロックでは展望テラスやテニスコート、南ブロックでは札幌軟石を切り出した岩肌を活かしたアート空間が並び、市民の憩いの場であるとともに札幌の大切な観光資源の一つとなっています。今回の会場となる南ブロックのネガティブマウンドは、古代ローマのコロシアムを彷彿とさせる空間。西洋を思わせる不思議な空間で日本の伝統芸能である能楽が演じられることに驚いた方も多いかもしれませんが、実は石山緑地開園翌年の1997年に地域の方々の手によって薪能が上演され、現在でも多くの方々に語り継がれています。自然の軟石で造られたアート、そして石切山と美しい木々で囲まれた空間という唯一無二の場所で再び薪能を上演したい、そんな想いから今回の石山緑地薪能プロジェクトが立ち上がりました。今年はちょうど石山誕生150年という節目を迎える年でもあり、薪能には欠かせない火入れを石山緑地にほど近い石山神社の宮司に務めていただくことをはじめ、本公演を実現するにあたり石山誕生150年記念事業実行委員会（石山地区町内会連合会）、芸術の森地区連合会、札幌市南区など地域の方々にも積極的に関わっていただきました。

あたら夜の月影 ―覧古考新―

薪能とは、主に夏～秋の時期に屋外の能楽堂、もしくは仮設の能舞台の周囲に篝火を焚き、その中で演じられる能楽です。およそ650年以上の歴史を持つ能楽は、現在では屋内の能舞台で上演されることが多いですが、昔は屋外の能舞台で上演されることが一般的でした。札幌でも過去に薪能が上演されておりますが、その数はそれほど多くはありません。そもそも、歴史の浅い北海道では日本の伝統芸能を目にする機会自体が少ない地域でもあるので、能楽に触れたことがない方が多数だと思います。また、過去に触れたことがある方でも、“能楽＝難しい”といった印象を持たれる方が多いのではないでしょうか。今回の公演コンセプトは「誰もが楽しめる新しい薪能」としております。日本の伝統芸能である能楽を一人でも多くの方々に見ていただき、そして歴史の浅い北海道から新しい薪能の世界を生み出すことを目標に３年以上かけて企画してきました。上演プログラムについても狂言師が解説を務める「狂言 道しるべ」、弦楽四重奏とお囃子、そして舞による「CLASSIC×NOH feat.雅vol.1.5-Miyabi-」、安達原伝説をモチーフとしたオリジナルの火入れ式「焔 - 鬼女の伝説 -」、そして能楽の代表的な演目である「安達原」と一般的な能楽公演ではあまり見られないような多彩なプログラムとなりました。さらには天空に浮かぶイメージの舞台に最新のテクノロジーを活用した音響・照明・映像などの舞台演出で、650年前の薪能の再現を目指しました。現代に古代が蘇る、まさに覧古考新（らんここうしん）の世界をお楽しみください。

日陰

狂言 道しるべ

出 演：茂山 茂、茂山 逸平　　後見：井口 竜也

石翳

CLASSIC×NOH feat.雅 vol.1.5 —Miyabi—

出 演：謡・舞：梅若 基徳

笛：斉藤 敦　　小鼓：上田 敦史　　大鼓：守家 由訓　　太鼓：上田 慎也

Les pommes²（レ・ポムポム）弦楽四重奏

第一ヴァイオリン：山本 聖子　　ヴィオラ：後藤 美和子

第二ヴァイオリン：瀧本 志保　　チェロ：藤田 淳子

火蔭

焔 —鬼女の伝説—

語 り：齊藤 信輔　　舞：松野 浩行

月影

安達原

出 演：シテ：林 宗一郎

ワキ：江崎 欽次朗　　ワキツレ：松本 義昭　　アイ：茂山 茂

笛：斉藤 敦　　小鼓：上田 敦史　　大鼓：守家 由訓　　太鼓：上田 慎也

後見：梅若 基徳、　松野 浩行、　河村 浩太郎

地謡：浦田 保親、　深野 貴彦、　齊藤 信輔、　樹下 千慧、　梅若 雄一郎

演 出

能楽師

松野 浩行

Hiroyuki Matsuno

本日はおよそ20年ぶりになります、石山緑地薪能「あたら夜の月影—覧古考新—」にお越しくださいましてありがとうございます。今回、演出を手掛けるにあたり、「能における演出」とはどういったものか…そこから考えてまいりました。能はセリフの中で「何処其処へ行った」と言えばその場所に移動したことになります。今回の安達原は陸奥、つまり東北地方です。札幌から移動しなければなりません。なかなか想像しにくいと思いますので、皆さんにイメージしていただきやすいよう、プログラム全体で北海道から東北への旅に出るのはどうか？ …そんな風に考えました。

ズバリ今回のテーマは『移り変わり』です。北海道から東北への移動、時の流れなど自然が発するもの、最新の技術によってもたらされる変化、言葉や体で表現する流れ…そういったものを五感で感じながら観ていただけるような演出を心掛けました。プログラムは、はじめに『狂言 道しるべ』が能の世界へといざない、途中の『CLASSIC×NOH feat.雅vol.1.5－Miyabi－』では神が降臨し西洋と和との融合を体現し、最後に「焔－鬼女の伝説－」で安達原の鬼の心情を表した本編『安達原』を演能します。忙しい日常を忘れて、ひととき、非日常の世界をご堪能ください。

［プロフィール］

1974年京都府京都市生まれ。幼少の頃より、祖父の観世流能楽師・故松野良輝より指導を受け、1979年仕舞「合浦」にて初舞台。1994年より故十三世林喜右衛門師に師事し、現在は林宗一郎に師事。2001年独立。京都にて松野吟耀社（松野浩行社中の会）を主宰。明るく素直な性格でいつもその場のムードメーカーで、斬新な切り口とわかりやすい表現で能の普及に努めている。現在の新しい取組として、キャンプと能を融合させた焚火能、YouTubeにて能の解説やとりとめのない話までも配信するほか、京都のホテルにて宿泊された方を対象としたイベントなどでプロデュースを行うなど幅広い活動を続けている。

CLASSIC × NOH 演出

能楽師

梅若 基徳

Motonori Umewaka

先ずは、「あたら夜の月影—覧古考新—」の開催、誠におめでとうございます。この壮大な歴史の流れる石山緑地と、世界最古の演劇「能」が融合した時に、どのような相乗効果が生まれるのか、今から大きな期待をしております。この壮大な大舞台にて、最新の音響や映像、照明などを活用した非日常的な空間で、今までに感じたことがない舞台をお楽しみください。

私は今回、CLASSIC×NOH feat.雅vol.1.5－Miyabi－の演出と実演もさせていただきます。コンセプトは、4万年前、支笏火山の噴火により出来たこの地に、天地創造の神が舞い降り、皆様に希望と新たな石山伝説を作りあげたいと思います。

「舞」に関しましては、能はフリー演技でないので、既存の決まった「型」を、どのように演奏に合うように組み合わせて成立させるかなど、悩みは尽きませんが、Les pommes²（レ・ポムポム）の皆様とは、昨年11月に競演させていただき、良く存じ上げておりますので、双方で本番直前まで妥協することなく意見を出し合い、また協調して素晴らしい演奏と舞にしたいと思います。

一夜限りの新しい時代の幕開けを、目と耳と心で感じていただきたいです。

［プロフィール］

重要無形文化財総合指定保持者、（一社）日本能楽会会員、（公社）能楽協会会員、（一財）日本伝統芸術文化財団代表理事、西宮能楽堂を主宰。中世より代々続く梅若家に生まれ、3歳より舞台活動を始める。梅若吉之丞に師事。関西を中心に日本各地で活躍。また海外公演にも多数参加し、2014年ロサンゼルス公演では、米国メイフラワー号の奇跡を題材にした新作能「五月花（メイフラワー）」を作成、上演し「ロサンゼルス名誉市民」に認定。日本の伝統芸能としてだけでなく、他の古典邦楽や現代演劇、音楽などとのコラボレーションも積極的に模索し、世界に通じる演劇としての評価や可能性も高めていきたいと考える。著書に「能に観る日本人力」BAB出版。

演　出

馬場　鏡丞

Kyosuke Baba

PROFILE

20歳から広告写真スタジオで写真を始め、25歳で独立。バレエ舞台を撮影した写真がパリHERMES本店で展示され、パリオペラ座エトワールの肖像権使用を許可された数少ないフォトグラファーとなる。札幌を中心に東京や世界各国で活動を展開。企業広告写真やTVCM、PVなどの制作を行っている。その演出が認められ式典プロデュースやプロジェクションマッピング、空間インスタレーション、バレエ舞台や演劇の脚本演出も手掛けている。今年、写真、映像、食べ物を軸にさまざまなものを制作演出するチーム、(株)IAMを設立。また作家活動も盛んに行っており、3・11の震災以降はエネルギーをモチーフに視覚化する写真作品に取り組んでいる。

安達原という演目は、少し怖いお話です。この怖さに中に、作者の哲学が詰まっております。不条理や悲しみに囚われた人の恐ろしさ、この『哀れ』が、人を鬼にする、哀れに囚われていく様こそが鬼の表出になるのであります。本当に怖いのは、心が囚われて我を失った人間なのです。それを演じるシテ方。舞の感情に寄り添い、謡の表現を響かせ、それを増幅させる。そして能自体が持つ、圧倒的な表現による説得力によって、舞台が昇華していく。演出ができることはただ、観る方が長い年月の中で見つけにくくなってしまった、空想のキッカケをほんの少し散りばめるだけ。舞台は見ることが重要ではなく、観ることを経てさらにその先を想像することが、本当の『見る』ということなのではないかと考えます。能の表現する世界は奥深く、計り知れないものがあります。しかしながら、それを解りたいと思う欲求と、辿りつくことができない幽玄の世界を垣間見た時に抱く畏怖、この相対する二つの狭間こそが、まさに今、皆さんが座っている能舞台の客席なのでは無いでしょうか？石山緑地薪能を舞台として表現するにあたって、理解すること、理解できないこと。理解という目的地や達成や到達が必要なのではなくそこに至らない『狭間』で、想像のキッカケを探しながら皆さんと楽しむことができたらと思います。

映像投影システム

能は、想像の芸術です。見る人が舞や謡にインスピレーションを得て、能舞台を越えて、演じられている世界を空想しつつ楽しみます。古来、能を楽しんできた人々は、ストーリーも謡もほぼ理解し覚えて観ることが多かったようです。戦国武将たちの中には自ら舞を披露する人までいたそうです。しかしながら、現代の私たちにとって、場面の移り変わり、そして台詞、今の言葉ではない能の謡を読解しながら舞台を見ることは容易ではありません。ですので、皆さんの頭の中の空想のお手伝いを…映像として具現化し、ほんの少しだけ石や森の上に映し出してみようと思います。あとは皆さんの空想にバトンタッチ。そしてそれが触媒になり、さらなる想像が皆さんの頭の中で増幅されることを祈っております。

照明システム

その昔、能舞台が、薪や灯籠、蝋燭等の光のみで行われていたであろう大昔の舞台の照明を想像し、近年の舞台のように電気を使い全てが明るくよく見える、ということ自体を再検証してみようと考えました。見えすぎず、ともすると暗い、見えないことは想像を膨らませ、より、『見える』につながるのではないか？ 能面の陰影がより現れ、登場人物の表情、感情表現の豊かさにつながるのではないか？ 能では少し俯くことを『曇る』と言うそうです。この『曇る』をより美しく表現したい。明るくてはダメなのではないかと考えました。自然の中、暗がりの中、目を凝らし、舞を凝視する。すると目には見えない何かが、現れてくるかもしれません。

舞　台

今回の舞台は、この石山緑地というアートを背景に日本が誇る伝統芸能を展開する、一夜限りの特別な舞台であります。１０００人の観客を動員し能舞台を作り上げる。企画はとても困難なものでした。そこで、この自然とその響きを最重要に考えることを主軸にすべきでは？と思いつきました。客席の後ろ側に山を配し、謡を受け止める。そして、この場所のビジュアルから受ける印象をそのままに階段を客席に見立てる。シテは夜の木々と共に舞い、謡いは石に染みていく、風も虫も、時には雨も、共に観客となってみんながこの自然の中に溶け込んでいく舞台となれば、と思っています。

音響システム

d&b Soundscape

石山緑地薪能では、ドイツd&b audiotechnik社のイマーシブ・音響システム「d&b Soundscape」を採用しております。元々石切場であった石山緑地は生の音でも、一見石などに反射をして音が響きそうなイメージがあります。しかし実際には屋外であり自然の音や岩の形によりかなり分散してしまいます。そのためスピーカーを設置して皆さんに音を届ける必要性が出てきます。ですが、それだけでは逆に反射を広げてしまい、不自然になる可能性があります。そこで世界各国において使用され始めているイマーシブ（没入感のある）の技術を用いて石山緑地という空間に合わせた、より生音に近い且つ自然な広がりのあるサウンドを作り上げます。観客席をぐるっと四方を囲う特殊なスピーカー設置で作り上げる唯一無二の音環境をご体感いただければと思います。システムの概要としては、今回使用する「d&b Soundscape」において「En-Scene」と「En-Space」の２つ機能があります。

「En-Scene」とは？

従来のLRシステムではスイートスポットはセンターに限られたエリアとなりますが、「d&b Soundscape」は全てのエリアがスイートスポットとなります。客席のどこにいても演奏者（演者）の立ち位置から演奏（声）を聴くことができるポジショニング機能です。

「En-Space」とは？

心地よい残響音が期待ができないスペースにコンサートホールのような残響音を提供する残響付加機能です。今回のような屋外では能楽堂やコンサートのような計算された残響音は期待できないため、客席の周りの360°にスピーカーを配置し「En-Space」を使用することによって心地よい残響空間を提供します。

［各国使用例］

AND MORE!

古来、能を行っていた時代には音響がなく生音にて行っておりました。
その時代の感覚をどうのように再現しつつ、また、より新しい表現にトライできるか？日本では初となる、Soundscapeシステムでの伝統芸能の公演。皆さんが舞台鑑賞に没頭できる音空間作りをいたしますのでどうぞお楽しみください。

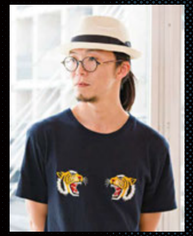
参考URL　https://www.dbsoundscape.com/global/en/

©IAM　Ryo Ohkawara

05 プロモーション

Promotion

メインビジュアル



ヤマガミ　ユキヒロ

Yukihiro Yamagami

PROFILE

1976年大阪生まれ。日常で見慣れた風景を鉛筆などで描画した絵画に、同一視点から撮影した映像をプロジェクターによって投影する「キャンバス・プロジェクション」という絵画に光と時間を取り入る独自の手法により作品を制作。これまで、東京ステーションギャラリー、アサヒビール大山崎山荘美術館、ビクトリア国立美術館など国内外での展覧会に参加。2014年から観世流能楽師 林宗一郎氏と「noh play」というプロジェクトに取り組み、能楽×現代アートの可能性を追求。第11回岡本太郎現代芸術賞 特別賞受賞。

みなさまこんにちは。「石山緑地薪能　あたら夜の月影－覧古考新－」のビジュアルイメージを描かせていただきました現代美術家のヤマガミユキヒロと申します。石山緑地という魅力的な石切場跡地を舞台にし、さらに現代的な音響や照明、映像演出もあるこの斬新な薪能は文字情報を読んでいるだけでも期待が高まるのですが、何より肝心の演目が、僕も大好きな「安達原」との事でもうワクワクが止まりません。今回のビジュアルイメージのコンセプトは、まずは舞台となる石山緑地のダイナミック感をパノラマビューで描くことによって表現し、そこに安達原に登場する老女（後半では鬼女になる）の儚さと、燃えたぎるような怒りや怨念の両極の感情が月の光によって見え隠れする、といったものを一枚の絵で表現したものです。それはまさに人間らしい感情の陰影のように感じます。この斬新で現代的な薪能はきっと歴史的な公演となる事でしょう。そのような公演のメインビジュアルの制作の機会を頂き本当に光栄です。さぁ今からの約2時間の公演、刮目しながらお楽しみください。

タイトル

本公演名である「あたら夜の月影－覧古考新－」には複数の意味が込められております。いずれもあまり聞き馴染みのない言葉かもしれません。本公演は当初から従来の能楽公演とは異なる印象を持っており、特別な意味あいを持たせたタイトルを模索しておりました。長い準備期間にもかかわらずあえて代替会場を設定せず、順延日も含めて雨天の場合は中止といった大きな代償を払う覚悟で準備を進めるなかで、これまで出演者、演出家、地域、札幌市など様々な協力を得ながら実現する事ができました。そんな経緯を踏まえたタイトルとして生まれたのが「あたら夜の月影」です。「あたら夜」とは現在の年号である令和と出典が同じ万葉集の言葉で、正式には「可惜夜」と記され、“明けるのが惜しいくらい素晴らしい夜”といった意味を持ちます。また、「覧古考新（らんここうしん）」は前漢の歴史書「漢書」からの言葉で“古い事柄を鑑みて、新しい問題を考察すること”といった意味を持ちます。本公演における会場演出のテーマは「最新のシステムを駆使しつつも、650年前の薪能を再現する」としております。こうして誕生した本公演名は、まさに本プロジェクトを象徴するものとなりました。

あたら夜の月影
―覧古考新―
Aratama no Tsukiyomi
Rankokoshin

©IAM　Ryo Ohkawara

©IAM Kohei Kawamura

安 達 原 ［あだちがはら］

あらすじ

修行の旅をしていた山伏たちは奥州にたどり着いたが、人里離れた安達原(現在の福島県安達太良山麓)で夕暮れを迎えてしまい、宿を借りようと一軒だけあったあばら家を訪ねることにした。そこには老婆が一人で住んでおり、山伏たちが一夜の宿を頼んだところ、あまりにもみすぼらしいから、と1度は断られるも、重ねて頼み込みなんとか泊めてもらうことに。山伏が家の中の見慣れない道具について尋ねると、枠枠輪(わくかせわ)という糸繰りの道具で、自分のようないやしい身分の者が使うものだと答え、求めに応じて操ってみせながら、月明かりに照らされ我が身の境遇と華やかな世界を明暗に見て涙にむせぶ。夜がふけると女は寒さを凌ぐため薪を取りに行くと言い、留守中に決して寝室を覗かないようにと念押しして出ていく。しかし、つい出来心から寝室を覗いてしまう山伏の一行の召使い。するとそこにはおびただしい数の人間の屍骸が山のように積まれていた。女の正体は安達原に棲むと噂されていた鬼女だったのだ。慌てて山伏たちは逃げ出すが、部屋を覗かれたことを知り鬼に変身した女が怒りにふるえ、嵐を吹かせ雷を響かせ背後から追ってくる。山伏は法力をもって対抗し、鬼女の力を弱らせると夜嵐の音に紛れるように姿を消した。

解　説

昔話で誰もが1度は耳にしたことがある「山奥に棲む鬼婆」の物語。シンプルに描かれた昔話では悪い鬼婆が迷い込んで宿を求める旅人を罠にかかった獲物のように食べようとする様子が描かれますが、元となった安達原では一口に悪者とは言い切れない女性の姿が描かれています。

みすぼらしさを恥じらったのか宿泊を断ったり、糸繰りを操りながら、この世の無常を嘆くと同時に華やかだった過去を思い返す歌を歌います。みすぼらしい家で眠るには寒いだろうと外まで薪を拾いに行ってくれる女性。薪を持って家に戻ると、決して見てはいけないと伝えたはずの部屋を見られてしまい、彼女は鬼となってしまいます。彼女は果たして旅人をだまして喰らう怖い鬼婆なのでしょうか。

「安達原」で描かれている物語の元となってると言われているのが「焔 －鬼女の伝説－」で語られた福島県二本松市に語り継がれている安達原の鬼婆伝説です。そこには「安達原」の前日譚とも言える物語が描かれています。「岩手」という名の女性が乳母として育ててきた姫を助けるために「胎児の生き肝」を求め彷徨い、住まいにしていた岩屋に宿を求めてきた若夫婦の妊婦の女性の腹を裂き生き肝を取り出したところ、その女性が生き別れていた実の娘だったということに気づく岩手。あまりの衝撃に鬼と化した岩手はそれ以来、宿を求めてきた旅人を殺しては肝を喰らう鬼婆と化すのです。果たして「安達原」の女性は、旅人を騙すために正体を隠そうと「部屋を見てはいけない」と伝えたのでしょうか。それとも鬼になってしまった自分を嘆き、人である自分を保つために鬼であることを隠そうとしたのでしょうか。「安達原」をご覧になった皆さんの目に彼女がどう映ったでしょうか。

シテ方

能楽師

林　宗一郎

Soichiro Hayashi

1979年京都生まれ。父・故十三世林喜右衛門、及び二十六世観世宗家 観世清和に師事。「鞍馬天狗」にて初舞台。2011年に独立。2012年「道成寺」披き、これまでに「乱」「石橋」「翁」「望月」「安宅」を披く。2013年より能楽自主企画公演「宗一郎の会」を開催。2014年に平成26年度「京都市芸術文化特別奨励者」の認定を受ける。2017年マレーシア国交樹立60周年記念公演にて「船弁慶」上演、岡山では幻の能「吉備津宮」を復曲上演。2020年「重要無形文化財総合認定」を受ける。また、林家同門と開催してきた「林定期能」が創立100周年を迎える。

※写真のシテ方は能楽師 樹下千慧

©人見淳　TOKIWA能（2023.7.8開催）「安達原」より

弦楽四重奏と能楽 競演から融合へ

CLASSIC×NOH feat. 雅vol.1.5 －Miyabi－

昨年11月、札幌コンサートホールKitaraにて初めてお能の皆様とご一緒させて頂きました。西洋音楽&舞の組み合わせは拝見したことがありましたが、既存のクラシック音楽、しかも弦楽四重奏とお囃子の共演は前代未聞！ 楽譜を置き同じメンバーで何度も練習を重ね作り上げていくクラシック音楽と、楽譜を置かず本番で顔を合わせ一つの作品をその場で作り上げていくお能、同じ時間芸術ではあるものの、本番へのアプローチが対極にある両者は果たして相入れることができるのか？直前まで高まる不安と緊張、見えない大きな壁に戦いを挑むようでした。この時は「羽衣」をベースにとのお話から、フランスの作曲家ラヴェルが作った弦楽四重奏曲(抜粋)を選び演奏しました。かくして結果は～融合～言葉では表せられない素晴らしい空間が「舞、お囃子、弦楽四重奏」によって紡がれ、ご来場の皆様からも大絶賛いただきました。

さて今回の雅vol.1.5は、前回もお世話になりました梅若様からのご提案でストーリー性を持たせることに。「天の神が舞い降り、地上を構築し未来への道標を掲げ、そして天上へ帰ってゆく」…この天地創造のイメージに合わせて、演奏曲も変わっていきます。先ずはイギリスのルネサンス音楽からスタートです。**W.バード(1540-1623)作曲 4声のミサ曲より“Gloria(グローリア)”**、そこからドイツの**J.S.バッハ(1685-1750)作曲“音楽の捧げもの”より Fuga(フーガ)**につながります。これは一つのテーマをそれぞれのパートが発展させながら音楽を立体的に構築していく、建造物のような音楽です。そして最後に弦楽四重奏のために作られたスペイン・セビーリャ生まれ**J.トゥリーナ(1882-1949) 作曲“闘牛士の弔辞”**で締めくくります。

焔 － 鬼女の伝説 －

続いての『焔』からは、既存の曲にアレンジを加えてBGM的な役割に廻ります。演出の松野さん馬場さんと打ち合わせた時の「下方(後方)に流れ続けているような音楽」という言葉をヒントに、イタリア初期バロックの**T.メールラ(c.1594-1665)作曲“今や眠りの時”**という子守歌の伴奏部分を取り出すことにしました。この時代の作品は伴奏部分の楽器編成やアレンジが自由なので、今回の内容に沿った私達なりの創意工夫を凝らしたいと思います。

皆様とここ石山緑地で素晴らしい時間を共有できることを感謝して。

室内アンサンブル
Les pommes²
主宰
ヴァイオリン

山本　聖子

Seiko Yamamoto

［プロフィール］

北海道教育大学札幌校芸術文化課程音楽コース卒業、同大学院修士課程修了。フィンランド国立シベリウス音楽院留学。札幌市民芸術祭奨励賞を新人音楽会とTerra<テラ>弦楽四重奏団「ショスタコーヴィチ作曲 弦楽四重奏曲全曲演奏会」シリーズにて受賞。室内アンサンブル Les pommes²(レ・ポムポム)主宰。令和3年度札幌文化奨励賞受賞。

08 教文：能楽への取組

Kyobun : Approach to Noh

和文化プロジェクトの発足［能楽なう 公演ロビー展示］

2018.6

能楽、文楽、歌舞伎など伝統芸能を積極的に紹介する札幌市教育文化会館(以下 “教文”)と様々な形で和文化に関わる人たちとのコラボレーションによって新しい文化を生み出すことを試みる「和文化プロジェクト」が2018年に発足。最初の取組は能楽公演でのロビー展示です。京都ブランドの和小物の展示や野点傘スペース、札幌芸術の森にて制作されたオリジナル暖簾、そして教文スタッフが和装での出迎えることで和の雰囲気を演出。更に伝統芸能の公演を和服で観劇する楽しさを提案したいという思いから、和装や和小物を取り入れた装いの来場者にプレゼントを差し上げる企画も初めて実施。ホール公演時にホワイエロビーでこのような取り組みを行うことで、ホール内外で賑わいが生まれ、話題を呼びました。

©Erika Kusumi

開かれる幽玄の世界 ～能楽展示～

2019.7

2019年の能楽公演プレイベントとして行った能楽展示は、札幌市図書・情報館、札幌文化芸術交流センター SCARTSとの連携企画によって初開催となりました。「能楽の魅力を新しい視点でみせる」をコンセプトに設計した空間は、まるで宙に浮くような二対の能面の展示や、楽器や書物の展示、そして三つのスクリーンに能面を映し出すなど立体的な展示空間を施し、従来の能楽展示とは異なる新しいアプローチを試みました。また、会場の隣に位置する札幌市図書・情報館では能楽に関する書籍コーナーが設けられ、展示の来場者が図書館で熱心に関連書籍を読むといった姿も。このような取り組みはSNSを通じて広がり、当初の動員目標を大きく上回る1350名を記録するなど、手応えを感じる展示となりました。

能面 × 花の初コラボレーション［能楽なう 公演ロビー展示］

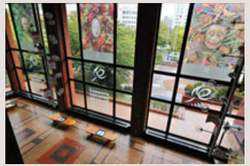
2019.9

好評となった2018年のロビー展示に続き、2019年では「能面」と「建物の中に出現した庭園」という二つの非日常を組み合わせた展示がフラワーデザイナーのYANASE氏と能面作家の外沢昭章氏の異色コラボレーションによって実現。15種類の能面が並び、その周囲をフラワーアレンジが施され、独特の世界が生まれました。また実際に能面を掛けられるコーナーを設け、札幌能楽会の皆さんによる解説とあわせて能面の視野の狭さを体験できるとともに、記念撮影スポットとしても好評を得ました。その他にも床に投射される映像や扇の展示、そして過去公演の巨大ポスターなど見応え十分なコンテンツを用意することで来場記念の思い出となるような工夫を随所に施しました。

教文情報誌「act」能面 × 花シリーズ

2019.12

2019年のロビー展示にて大きな反響を得た「能面×花」作品を展示だけではなく、教文オリジナル作品として残していこうと取り組んだのが教文情報誌「act32-33 夢幻」です。「心」「美」「神」をコンセプトとした三つの作品が新たに生まれ、各面の歴史や背景を踏まえたフラワーデザインが施された作品はまさに夢幻の世界。能の世界では人が鬼となる作品も多いことを踏まえ、「人は心次第で神にも鬼にもなる」といった共通テーマをもとに制作。本号で選ばれた能面は孫次郎(女面)、大飛出(鬼神面)、蛇(怨霊面)の三点。更に2023年には「ACT44-45 幽玄」として白式尉(翁面)、中尉(男面)、鼻瘤悪尉(鬼面)の三面を加えた能面×花シリーズvol.2が完成したことで、能楽五番立とされる「神・男・女・狂・鬼」に「翁」を加えた作品が誕生しました。



教文和文化プロジェクト 開かれた「和の空間」

2020.8

憩いの場として長年愛されてきました教文の市民ロビーを和文化プロジェクトの一環で「和の空間として再生させたい」、そんな想いを込めて巨大なウインドウスクリーンとして設置したのが前述の「能面×花」シリーズのオリジナル作品です。吹き抜けの広い空間を囲む木々は季節の移り変わりとともに表情を変え、三つの作品と組み合せることで強いインパクトを与えました。これらの作品の他にも切り絵作家・最上怜香氏と書家・若山象風氏による「和文化プロジェクト」の作品も掲出。また、別エリアでは教文が建設される以前の、周辺地域の歴史を紐解くパネル展示、「もっとつながる もっとひろがる 和の心」を表現したパネルを掲出し、新しい空間として生まれ変わりました。

教文たまてばこ 能舞台ができるまで／ぬりえでござる

2021.1

2020年から未曾有の新型コロナウイルスの影響により生活が一変。不特定多数が集まる主催事業は中止を余儀なくされ、芸術文化を取り巻く環境においてもこれまでとは異なる新しい価値観を考える厳しい局面を迎えました。コロナ禍によって人と人との交流が大きく制限されるといった状況下で、新たに生まれたのが「教文たまてばこ」です。長期間に渡って芸術を楽しんでいただく機会が制限されるなか、自宅でも楽しめる芸術を模索することを趣旨として様々な分野の取り組みを行いました。能楽分野については教文の屋根付き能舞台の設営風景を楽しめる映像コンテンツ「能舞台ができるまで」、そして塗り絵で楽しむ能楽として「ぬりえでござる」などを発表しました。

©Erika Kusumi

能楽展2023 白鏡-明滅の虚空-／黒戯-幽闇の隠者-

2023.8

2019年に初開催されて以来、二度目の実施となった能楽展示。「能楽に触れたことがない人に魅力を知ってもらうこと」をテーマとしながらも、前回から規模や内容を拡張し、札幌文化芸術交流センターSCARTSの1・2階にてコンセプトの異なるイベントを開催。1階のSCARTS COURTは「白鏡-明滅の虚空-」と名付け、“白”を基調とした展示を開催。VRを使った能舞台体験や巨大な能面と能舞台模型のほか、自主製作されたホログラム装置の周囲には能面と花を新しい作品として設営するなど見応え十分な空間が生まれました。2階のSCARTS STUDIOは「黒戯-幽闇の隠者-」と名付け、1階とは逆に“黒”を基調とした空間に。ここでは石山緑地薪能でも上演する「安達原」を題材とした脱出ゲームを開催。原作を現代に置き換えたストーリーで展開し、ゴールすると原作の解説が行われるといった工夫を施しました。

©武田博治

CLASSIC×NOH -弦楽四重奏と能が織りなす新たな世界-

2023.11

2023年に札幌コンサートホールKitaraと札幌市教育文化会館の初連携プロジェクト「雅 vol.1- Miyabi- 」を立ち上げ、初回となる公演をKitara小ホールで開催。日本を代表するクラシックホールであるKitaraと伝統芸能を事業の柱とする教文の特性を活かし、クラシック弦楽四重奏と能楽囃子、舞の異色のコラボレーションが実現しました。公演は2部構成で第1部ではクラシック、能のそれぞれの歴史や仕組みについて実演を交えた解説、第2部では合奏が行われるなど実験的な取り組みとなりましたが、チケットは完売し、満席の中で大きな反響を得ました。西洋と東洋、クラシックと能という不思議な組み合わせが生み出す独特な世界感が確かな手応えとなり、石山緑地薪能の上演プログラムにも組み込むこととなりました。

土木・上下水道・法面保護・造園・管理

浅野建設株式会社

ISO9001/ISO14001

代表取締役　木嶋（きじま）　かすみ

〒005-0842 北海道札幌市南区石山2条4丁目4番32号
TEL 011-591-8123　FAX 011-591-8159
E-mail kijima@asano-sapporo.com

石山商店街振興組合

理事長　小島　浩正

〒005-0841
札幌市南区石山１条３丁目1-30
Tel　011-591-8639
Fax　011-591-8640
e-mail kirameki.ishiyama@sky.plala.or.jp

株式会社　岩本石庭

IWAMOTO SEKITEI Co.,Ltd

代表取締役
岩本　任功
IWAMOTO　HIDENORI

〒005-0003
札幌市南区澄川３条２丁目５番７号
TEL 011-833-5128　FAX 011-833-5127
E-mail sekitei1@viola.ocn.ne.jp
URL http://www.i-sekitei.co.jp

リフォーム&オーダー家具ショップ
株式会社　うっどすたいる
011-790-7183　〒005-0842　札幌市南区石山2条2丁目2-27

うっどすたいる
20周年記念ソング
song by 小澤ちひろ

LINE
お問い合わせ気軽にどうぞ
@vmv1369x

instagram
woodstyle.sapporo
オーダーメイド
リビングテーブル
高床電動昇降テーブル
ちっぱなしテーブル

うっどすたいるの
公式アプリが
できました！
使えるお
問い合わせも
クーポンも！

有限会社 小島電設

札幌市南区石山2条5丁目7-39
電話：011-591-8029　FAX：011-591-0326

SUISYO

特定建設業
株式会社　水章工業

本　社
〒004-0872　札幌市清田区平岡２条２丁目７番１８号
TEL（011）886-7600　FAX（011）886-7601

事業所
〒005-0842　札幌市南区石山２条３丁目１５番４３号
TEL（011）522-8991　FAX（011）

墓石・石碑・石材工事一式 札幌軟石採掘加工販売

S.T　辻石材工業株式会社

〒005-0842　札幌市南区石山2条2丁目2-5
e-mail　tsuji-sekizai@tsuji-nanseki.com
ホームページ　https://www.tsujisekizai.com/

TEL:011-591-3939
FAX:011-591-3280

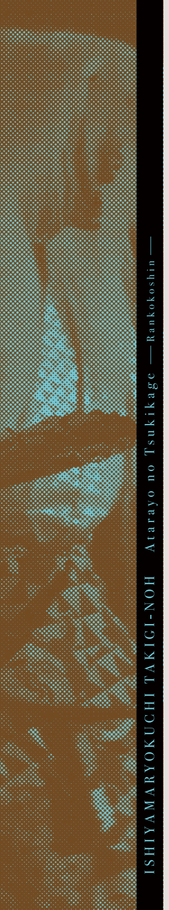
不動産の買取や仲介・解体など、
土地建物のことなら「トチタテ」

とちたて
TOCHITATE

TOCHITATE株式会社

〒005-0841 札幌市南区石山1条7丁目7番43-2
tel：011-211-6806　fax：011-211-6808

ISHIYAMARYOKUCHI TAKIGI-NOH Atarayo no Tsukikage —Rankokoshin—



ISHIYAMARYOKUCHI TAKIGI-NOH　Atarayo no Tsukikage —Ranokoshin—

中定建設工業株式会社

代表取締役　中　西　光　宏

URL

Nakajyo Kensetsu Kogyo Co.,Ltd

本社 〒061-2302 札幌市南区定山渓温泉東1丁目68-1
TEL 011-598-2181　FAX 011-598-3512
E-mail:m.nakanishi@nakajyo.jp

ISO9001取得

お届けします、あなたの心を花束に託して…

＊慶弔籠
＊アレンジメント
＊花　束
＊鉢　花
＊活花材料

花のおおいそ

〒005-0842 札幌市南区石山2条3丁目1-24

TEL 011-591-8455
FAX 011-591-4518

150周年おめでとうございます

社会福祉法人北海道ハピニス
和幸園・グリンハイム

福祉・介護のことなら「何でもご相談ください！」
自宅での生活の相談から施設への入居相談まで「何でもです！」

HOKKAIDO/HAPINESS

☎ 011-591-5211　札幌市南区石山 933 番地 3

行政書士

山　本　隆　巳 事務所

札幌市南区石山1条1丁目3−1
TEL 011-592-1393　090-4879-0525

横浜植木株式会社

＜指定管理者＞

藻南公園・石山緑地・常盤公園

小金湯さくらの森

イタリアジェラート協会主催国際コンクール世界4位
日本に100にしかいないジェラート協会認定マエストロ

GELATERIA
torinosu

南区石山2条2丁目7-33　TEL 011-600-1704

@GELATERIA_TORINOSU

石山緑地薪能『あたら夜の月影 ー覧古考新ー』
プロモーション映像

https://youtu.be/_yhAv7JWc3A

スマホからはこちら

教育文化会館リニューアルオープン記念・プレイベント

主　催：札幌市教育文化会館｜札幌コンサートホール（札幌市芸術文化財団）　札幌市

共　催：北海道新聞社

後　援：札幌市教育委員会
一般社団法人北海道公立学校教職員互助会

制作協力：能楽大連吟
一般財団法人日本伝統芸術文化財団
関西舞台芸術研究所
株式会社IAM

協　力：札幌市南区
石山誕生150年記念事業実行委員会（石山地区町内会連合会）
芸術の森地区連合会
石山神社
札幌演劇シーズン実行委員会
札幌能楽会
ソニーマーケティング
ディーアンドビー・オーディオテクニック・ジャパン

助　成：一般財団法人 地域創造
芸術文化振興基金助成事業

特別協力：STV 札幌テレビ放送

協　賛：札幌大同印刷
東リ

あたら夜の月影

—覧古考新—

Atarayo no Tsukikage —Ranokoshin—

SAPPORO ENGEKI SEASON 2024 Satellite Program

芸術文化振興基金助成事業

札幌市教育文化会館

Sapporo Concert Hall

メインビジュアル：ヤマガミユキヒロ